



雲觴無底抄

つるまよ

特別  
~12  
1077  
35





利  
1077  
3435



若菜上

母九歳

太上天皇

朱雀院御心事

梅壘女侍之腹女之宮侍事

九年十二月

同宮可有侍裳者事

春宮行啓朱雀院事

年暮中納言君系朱雀院侍物語事

夕霧入今年十九之廿二日入心之御事

ふふよふふとて廿二日入心之御事

不述ハハハ

中宮院出女之文清乳母達物詰給事

清乳母詰才在申辨六條院女三宮可被附

屬申六條院事

大政大臣就高侍為清子右衛門督申女

女三宮可被附屬申六條院申可被附申春宮院

女三宮清裳著事於中宮院和殿有此事

大政大臣為清腰結事

秋好中宮獻裝束搦宮於中宮院給事

吉事一之今日以後中宮院清出家事山座主為清戒師

六條院渡中宮院給女三宮清後見領杖給事

又之日女三宮事詰紫上給事

四十歲同

女三宮可被附六條院給事又六條院平賀物

正月廿三日在女將北方獻若菜事

大將男二人此次見奉六條院事

依中宮院清藥不召樂人聊有清遊事

二月十餘日女三宮被附六條院給事

南清殿歌出立侍帳事

紫上与女三宮侍事

紫上見源氏侍身入殿給事

源氏若自紫上侍方送消息於女三宮侍方

給事 女三宮住  
寝殿給事

源氏令見梅花於紫上給事

源氏盡時方渡女三宮給事

朱雀院移西山侍寺給事

朱雀院歌侍消息於女三宮給事

同送侍文於紫上給事

朧月夜内侍上位二條宮源氏密通事

女房中納言君弟和泉前内侍事

他藤盛

内侍上對面事 語紫上給事

明石女侍自夏比侍胎氣暫出六條院給事

南清殿東面為侍座紫上此方侍給事

侍對面あり女三宮女三宮侍對面あり也

源氏見紫上手習給事

明石女湯草上女三宮小名湯見奉事

十月草上為六條院御賀於淺水堂供奉藥師

廿三日於二條院有湯賀事

於寢殿於出有事

十二月廿日餘秋好中宮為源氏湯賀七太寺湯誦

夕霧方中納言任大將事

自内裏賜六條院湯賀事夕霧大將奉行於長町此

四十一歲日

正月一日始明石女湯御產湯祈事歲十四

二月明石女湯御所名湯町中村給事

明石石若母上女湯御物諸事

三月十餘日女湯御之產事

七日夜自内湯御產養食事

明石入道文道母若事

須弥山夢事

明石上奉女湯御方奉見入道文箱事

紫上奉抱若宮事

源氏若見御文箱給事

紫上与明石上清中事

大将若与女三宮清事

相本右衛門督与女三宮清事

三月於六條院有鞠興事

大将先於良町有鞠事

入於寢殿東面蹴鞠事

右衛門督自御簾隙奉見女三宮事

右衛門督抱猫事

食椿餅等飲酒事

右衛門督与大将同車退出給事

右衛門督付小侍從奉文於女三宮事

若草上

以歌并詞為卷名

何

小まのりて舟末乃くまひりひらまてや  
野多しけより好も子代とけし切てい

松云河廿八た大ゆあて少ゆいあま  
まはとありあうの若く九はる時  
若草をりみ事常乃事く 如介  
まうそあまの野よ出くうれは  
夜よ小雷くぬりけくこまこはなる  
けまし乃一名くこまみ山もたねくはむ

何





録之義同前篇以簡策繁多故方上下二  
卷、し又身其卷より上下と方ハ後漢書列傳  
と撰と作と

<sup>元</sup> け物洛土上下とていふてはゆり人望ていふり  
抑若等上とてサもていふとサ下といふて  
抑も或廿一よてそふを漢書の高祖十一  
と才一ありて下と才二といふは高祖紀と才  
二もていふいふの例もはひふりあり曲  
礼と下ハ記者といふなり一夫の中も上

トありと撰と上下ハ後人伝をけらるる  
とて等第の意もなかり故も二夫の中も上  
とてそてたり河海の四流ありて  
かの上は夫もハた大おのいふ方よりねり  
給りあり観りし列の等もいふ給り  
トましよは女之宮を産乃卒傳のさ  
等もいふ世経といふりていふりていふもいふ  
乃高祖のいふてわれれ事ハあて  
志と下よりいふのさもいふりていふ

乃事におあしく詞成ハ舟ノ事著す何ふ  
みらして事ノ名といせぬあしはまは  
く源氏若井九より軍一歳きて二十一年  
此事を乃せり

秘

け上美ハ五つ源氏一のみあつてせ居り  
あり下美ハ六つ事産院乃事此はあま  
ふふきてまつせり(三)よりありあけ  
ま名とせり上下にらる事ハ其羽の書  
籍に載るあり抄めりてそり元事

みららる事書し何り又此は秋深  
成りて上下にらる事とあり  
日中みり別日常記津代上下物語り  
るうつふの物語上下よりり河海  
上後漢書事乃河海ありは  
る益と他人此を奥ゆはしてハ源氏  
九乃ありり女之文書著り事  
あり字乃事賀乃事并の事申事  
二十一年の事申事

乃事ありき

<sup>舟</sup> 夫名源氏平十郎をむろくせむ  
かまひししむしけ事ての娘ハ源氏世乃  
ろより平十郎の幸又書て平十郎  
去りて

身産院のみありしむろくの後

<sup>河</sup> 藤裏葉に六条院小行寺ありき  
<sup>秘</sup> 六条院(清華)

ししむろくありしむろく

<sup>舟</sup> 高者の子(靈運) 日本化神伝

源乃清兄身産院清華

おこふひのさいりき

身産院乃清(清華)ありき

いふこのま乃清ありしむろく

私

弘徽媛乃女后にけ母后崩の事並  
りしとすしに始てくまの出とて存を  
身崔沈の清綱は美に西后のせは  
みより院不考をせり一子

身

れう乃さたにゆよす

秘

清出家乃事

ゆりき清の事

はあひひれこの清の事  
文よりまの事ゆりしうの事

くふく是より女之文とゆへあひ  
事乃いてる事

去久しとてゆは

身崔清子後女今上とゆへ  
はりては万葉に清の事  
林とてあひり女をりか  
るまはの事とてい

身崔院

今上

女一宮

母崔清の女  
明石まは二宮とゆへ  
去久しとてゆは  
は美にみゆ

秘

身産の清子ころこ長女ハ上ノ事  
ハ冷泉院ニ葬同

日  
いころ

秘

女一久藤葉又女之又女ハ是

そ乃中に有つふしきこ

秘

藤雲女院の清姫武部守実

弄

藤雲と別腹

秘

延喜時氣香友女清心之伝源和子先考

天皇乃傳也け女清の伝腹小慶子詔子

御子内親王三人ありい御女之又ハ是

小あとは御女ふもや

同云

先帝乃傳也めれ

弄子名んていり何りせんこい

所

皇女賜源氏姓例

藤葉宮

母一條房息女

り子下、御女を多の清女

二内親王

母先帝 傳氏

け美、女ら重隆よりわらうりて京一

御子まし御女を多の清女

女で、又け事しめ

嵯峨天皇之女貞姫正高 潔姫正三 全姫高侍  
從善姬以上四人弘仁五年五月八日勅賜源朝臣姓

醍醐天皇時女御源朝臣和子兼善女亮若天白之女  
醍醐天皇之女源朝臣兼子源朝臣兼子  
宇多天皇之女一人賜源氏姓

中ノ坊中ノ坊 身身 產產 代代 子子 八八 后后 三三 女女  
身產の去久乃乃時よりけ源氏女  
三つきくらひみめ

并 后の事とひ身產代子八后三女  
てこーし

松 三后も多く三つありしはみめ也  
身產代子八后三女一善女の内  
しして三后多きなりと源氏を  
始むるは其後之より三后三女  
子八つを一人とありしはみめ也  
大いさい乃内約なり  
弘徽殿乃脱月夜とありぬを

みとし清公のうらむいとせし

<sup>舟</sup>身産の清をよりくせう海てお公

—入あり脱月をそのつは

<sup>秘</sup>身産乃ゆをよりくせう

ありふせぬめ

<sup>元</sup>身産流乃脱履乃身とけし

を中しとくみか

源氏まをせぬみてくせ

るれやし清と十三四

女之まの清とくわし

いぬしとむき

身産の清を

ふらりしあしなられを

ふらりしあしなられを

ふらりしあし

<sup>何</sup>ふらりしあし

たのむきあくりみら

位なる川秋 諸およひ



山なり清寺にありて

秘 何 仁和寺と抄にみえり

李都王記云天曆六年二月十五日太上

天皇遷御仁和寺鹿子内親王所領也

三月十日清出家

元

新四史云仁和四年八月十七日於新造西

山清願寺行光帝周忌清會今案此

あり清寺といは仁和寺といふ光孝天皇此

清願寺といは仁和寺といふ光孝天皇此

て仁和寺といは早うせり別光孝天皇此

周乃清願寺といは仁和寺といふ光孝天皇此

の所安んじ後延喜元年十二月五日仁和

寺にありて同元年遷御仁和寺にあり

仁和寺金剛并舎乃三摩耶形といふ事

仁和寺の天曆六年二月廿五日出家ありて月

子仁和寺に遷清ありけり後延喜元年遷御仁和

寺にありて同元年遷御仁和寺にあり

仁和寺といふ事あり

弄

春宮の御所山庄幸准仁和寺大御所の御  
乃女として仁和寺より御所へお移り  
御所より一平に御移りて御所へ  
私に御移りて御所へ御移り

秘

こ乃女の御所へ

女二乃女の御所へ

院に御移りて御所へ御移りて御所へ

春宮院の御所へ御移りて御所へ御移り

乃女に御移りて御所へ御移り

處へ

秘

中宮の御所へ御移りて御所へ御移り

春宮院の御所へ御移りて御所へ御移り

記へ

春宮の御所へ御移りて御所へ御移り

春宮の御所へ御移りて御所へ御移り

乃女に御移りて御所へ御移り

乃女に御移りて御所へ御移り

春宮の御所へ御移り

秘

乃女に御移り

春宮の御所へ御移り

乃女に御移り

おぼろげにうらなひのうらなひ

あまのうらなひ

まゝのうらなひ

うらなひ

<sup>秘</sup> 女侍の池の事

女侍ならぬ事

私云は外男

くもては

まよひ

おぼろげ

この世

寺

さう

<sup>可</sup> 老

い

私

事

お別



香取の女三の事と云ふのじふに御座り  
なすよと云ふ事

はまの女三の

此の母は

いふ香取の女三は右三の女三の果は  
その事一と云ふれは其の事と云ふ事  
是事一と云ふ事と云ふ事

朝夕の事と云ふ事

香取の事と云ふ事  
はまの事と云ふ事

是ハ香取の事と云ふ事  
その事と云ふ事

秘

近江の事と云ふ事

その事と云ふ事

香取の事と云ふ事

是ハ香取の事

香取の事と云ふ事

中納言

夕霧の牛薙へまひし

故院のうら

元桐壺の御門の御事、御事ありけ院の御

氏の御事秘

秘牛薙院の御事

い海のうら

秘冷泉院

とらふといまれあやまら ちぬのたけ事

元朧月夜の手 ちりて御事御事

とらふといま

ありまひんとし

可以根報をま不可勝計

ちりのちひぬといおらうとを

その心くえりしうら

トの根のいばうら

まをましめとを

秘ゆきの御事とせし御事

松をいひまらうらこの御事を

しつこみま



くまれきにさあきしげい

<sup>花</sup> 冷泉院を天曆のみとしおすくひる

<sup>何</sup> 貞觀政要云太宗問魏徵曰何謂明君徵

曰君し所以明者兼聽也其所以暗者偏

聴しこの語ありてをいひたり

年薙れ我の代の事と早下りし

け秋のひききの後

<sup>何</sup> 藤裏葉にさるるくひなきう

其日あしりともてけ秋とありし

<sup>花</sup> 十月と秋としつうの葉と葉と

年と秋といふ方と去りそと秋と

<sup>并</sup> 長秋といふ方と去れ属しそ秋と

長秋といふ方と去れ属しそ秋と

<sup>秘</sup> けあわりのきい十月と秋と

右裏葉のりき十月と秋と

たいりん

年薙れ我の代の事と早下りし



子存に夕霧にゆふはは刺し

こゆりゆきし

秘

是より夕霧のそききし一切おれぬ事  
何ともゆりゆきし

私とゆりゆりゆひの事ゆきゆき

そききしゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

こゆりゆき

可  
年ゆきゆきゆきゆき

秘

夕霧のみゆきゆき

ダイセウ

大小の事

事秘

いみゆきゆきゆき

秘

兼にゆきゆきゆきゆきゆき

こゆりゆきゆきゆき

大倉けのゆきゆきゆきゆき

臣の臣道ゆきゆきゆきゆき

皇代考親ゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

たましくといふや

故院の御孫の御孫

秘 信得 自 如 遠 之

并 源氏女大やげよはしと作ありし

御くゝの女おりし

并 在 此 御 位 事

秘 皇政の御孫の御孫

乃おしきまはせしくは我包の御孫

まことの御孫

心しをさげて

いぬくまの御孫

秘 只今三付の御孫

をさげせよの御孫

不世の御孫

源氏とてを政大臣の上天をさし

しつゝありまはせし御孫

并 大あしきし御孫

秘 又藤原の御孫十九歳之

并 又藤原の御孫十九歳之

いふ文の御孫



きんちうしんし

世房のまじり事と牛産のまじり事と

うまひいしめい

秘 六博院の海の手とわめて集作の海

このせめてねひまじり

源のうらまじりしと割帳のうらまじり

うまひいしめい

秘 林の中をまじりしと乃のまじり

うらまじりしと

海のうらまじりしと

何事かしりこの世

お世の高執りしと人々

帝主乃のまじり

二下りしと

松くすしと

ひらりあつてや宰相とてあつて

お東院のまじりしと任承院のまじりしと

廿一具信と昌泰三年任承院

秘

源ハ女一とて希淺キあり多クハ  
ぬむかへ拜座あり早ト一  
とまよはれいふいふあり

花

夕霧ハ十九とて中絶言ハ  
夕霧ハ拜進子進ありや

二乃おやしのもろひ

源ハ源乃威之のまろひ

あましねと

秘

夕霧の事

あましの事ハ源ハおろ

おろすけの事

あましの事ハ源ハおろ

ひめ交り

秘

女三乃交の事 弁

あまの事

あまの事ハ源ハおろ

あまの事

あまの事

秘

あまの事

中より申す

林好し

この中納言の

夕霧し

中納言の

夕霧し

中納言の

夕霧し

夕霧し

かの

夕霧し

夕霧し

かの

夕霧し

夕霧し

秘

夕霧し

夕霧し

夕霧し

夕霧し

夕霧し

夕霧し

夕霧し

夕霧し

夕霧し

夕霧し

秘 女まてあゝの必源女ハあまむじうらーん  
女乃あざむじうれせ

啼せしき舞や 朝啼乃年々

九彈ゆあまむじハ朝したうらうらやれ

しのまらの事と

秘 弟子比へ 因

こ乃清くうらうらと

女これあうらうらみこらじ

花中弁 系馬の介れん

秘 六条院乃むじのたうらうらや

こ乃まみし

弁 女このまみしむらうらうら

このうらうら

御め乃のた中弁むらうら

うらあしうら

秘 女乃中のた中辨々お落とらうら

女乃作ら女このあしうらと六條院

か乃院々 秘 六條院へ

ふこそららひしり

是女あしはらやれ事なまらやれはを

とせしそまらつる人のみえぬりあはれ

ふとてそまらつる

事産の介め女このたけこらよしあはれ

をのまてんけいさうまらあはれ

事あらたきもの清らけりしりあはれ

事とあはれ

そいのかり事

不ふ乃事らるのこ事あはれりしり

事らるる事

事産あはれよのけりやれ事なまら

うしあはれ

事あはれ事

かあはれ事

事あはれ人の中らるる事

事あはれ人れをぬみあつてはれ

らるる事





1  
何にきりしはるし書物なるしは女史  
源氏に馬家ありてはまはらまはるし  
まはらまはるしはるしはるしはるし  
まはらまはるしはるしはるしはるし  
まはらまはるしはるしはるしはるし  
まはらまはるしはるしはるしはるし  
まはらまはるしはるしはるしはるし  
まはらまはるしはるしはるしはるし  
まはらまはるしはるしはるしはるし

はかひはせりし

まはらまはるしはるしはるしはるし  
まはらまはるしはるしはるしはるし  
まはらまはるしはるしはるしはるし  
まはらまはるしはるしはるしはるし

⑤ け 綱より下は源氏のゆかりとす

秘 如きれあふたかふた

源乃自稱し強者のなり  
とて巻をばらしてあはるし  
はるしはるしはるしはるし  
はるしはるしはるしはるし  
はるしはるしはるしはるし

并

仲氏の清くをくちふのさふらふのまじり

人のまじりまじりまじりと脱月本を解のまじり

のまじりまじりまじりと人のまじりまじりまじり

はみんかみんまじり

まじりまじりまじりまじりまじりまじり

まじりまじり

<sup>秘</sup>まじりまじりまじりまじりまじりまじり

まじりまじりまじりまじり

源のまじりまじりまじりまじりまじりまじり

まじりまじりまじりまじりまじりまじり

流のまじりまじり

流のまじり

けまじりまじりまじり

<sup>秘</sup>まじりまじりまじりまじりまじりまじり

まじりまじりまじりまじりまじりまじり

まじりまじりまじりまじりまじりまじり

まじりまじりまじりまじりまじりまじり

まじりまじりまじり

可 類也

<sup>可</sup>周易云君子以類族辨物同人卦

毛詩曰六幼寤備女君子好仇臣曰寤寤寤困  
也德善仇后妃有用睚之德是迷困貞  
專之善君子之好速也

めりしよよのけし

女之乃めれしん中辨とお流さしやと崔

戸入ふこふあうれ明良といん申辨と崔

かの流みの 六条院し

あすうけびき

黄公の  
字ははえ  
五又

兼川し 兼深乃を

うーめれけい

弟女在中辨乃女之のめいしは流りまれ

こあこうれいの流り

兼崔し流りし乃まし兼し兼るましに原

りし兼し原し流り兼川わりして兼るましし

そはりんましはしつとまし兼のれをい

原りなりしとまりあし并ん女之れめれ

兄弟すしハ月捨し

いらあうし

清月のよれ月影の如し

かしくはけきつ

昇

清月のよれ

ありよの詞そ人さくさくあつ申はけし

私原乃清をよめる人の如くはけし

わ勿漏れし

そく人さくさくはけし

凡人さくさくひんたらくひんたらく

あつてせきまのあつてせきま

あつてせきまのあつて

あつてせきまのあつて

あつてせきまのあつて

あつてせきまのあつて

あつてせきまのあつて

あつてせきまのあつて

あつてせきまのあつて

あつてせきまのあつて

あつてせきまのあつて

あつてせきまのあつて

いふもの上驚ありしにち海をくわはば  
ていんよむむらむれをいといふ  
秘  
上右ノ事ハ淳素ヲヤトシ海ヲサトス  
あつと今の世ハ何事かといはれし我をいふ  
一語りていふ南島のあひひといふか  
何事とあがりち海にありし事ハ  
ス〜くわむらむれいふこと  
秘  
上右ノ事ハ淳素ヲヤトシ海ヲサトス  
あつと今の世ハ何事かといはれし我をいふ  
一語りていふ南島のあひひといふか  
何事とあがりち海にありし事ハ

るりゆふ別〜むらむらありていふ下  
秘  
上右ノ事ハ淳素ヲヤトシ海ヲサトス  
あつと今の世ハ何事かといはれし我をいふ  
一語りていふ南島のあひひといふか  
何事とあがりち海にありし事ハ

秘  
身菴院の作  
上右ノ事ハ淳素ヲヤトシ海ヲサトス  
あつと今の世ハ何事かといはれし我をいふ  
一語りていふ南島のあひひといふか  
何事とあがりち海にありし事ハ

よふふふふふふふふふふふふふ

かこつらのつらさ

<sup>花</sup>もさるゝのふらふらとさるゝ

<sup>并</sup>かこつらのつらさのつらさのつらさ

次りつらさつらさつらさつらさ

みまふはてつらさつらさつらさ

みまふつらさつらさつらさ

さるゝのつらさつらさつらさ

かこつらのつらさつらさつらさ

又さるゝつらさ

さるゝのつらさつらさつらさ

のつらさつらさつらさつらさ

つらさつらさつらさつらさ

人乃かりつらさ

<sup>何</sup>平切類云とせり也

若の人のつらさつらさつらさ

まらぬつらさつらさつらさ

みまふつらさつらさつらさ

あゝいれやのやうてはな

をよてふかゝりし

可

うゝいせも老りしきぬにわきと

たのしき

えのれりてとやうにやう

いひてやげらみかき

かゝりしものもさうさうに

あやのあはれさうさうに

くゝいふたれあやうに

せりりあういひてはげら

秘 奇  
らんと同書

高ト乃事( )

うりようり

あやうさういふ

よてら

秘 若かたはげて

がとほのる

あり

秘 是にトに親よ



うり公はうらむひさしむら女事しあふ  
てのこふみれさしうひあひあははるまは  
ふまことあましものうらぬまはけけ  
あり時いんつさあくあうゆら  
とやいさうまゆ

何  
孟子曰女子生而頼為有家父母し口人  
皆有之不待父母之命媒妁し言鑽允  
淳相穴規踰備相從則父母四人皆賤し  
秘因之け事しとリク勝文公章句下孟子

何  
寄言痴少人家女慎勿将身輕許人  
白氏文集并盧川銀瓶上姪奔也  
不及此事

あましうらむひさしむら女事しあふ  
てのこふみれさしうひあひあははるまは  
ふまことあましものうらぬまはけけ  
あり時いんつさあくあうゆら  
とやいさうまゆ  
みはうらむひさしむら女事しあふ  
てのこふみれさしうひあひあははるまは  
ふまことあましものうらぬまはけけ  
あり時いんつさあくあうゆら  
とやいさうまゆ  
三男唯一で外無別法乃とく家  
よましとらむまはけけとふかれてさく  
あましうらむひさしむら女事しあふ

秘

花もたふと敷ーカこらりあつて  
まじりかたさしいきしあし

くらあふくよみあすつらしひんちや  
くらあふくよみあすつらしひんちや  
くらあふくよみあすつらしひんちや  
くらあふくよみあすつらしひんちや

秘

女ごまの事し

花  
是らりしに女ごまの事し  
まらたしよしあまに花の何は

ゆきもはらふもあつてまららるる  
まららるるまららるるまららるる  
まららるるまららるるまららるる

秘

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

秘

あつてあつてあつてあつてあつて

花

花のまらるるまらるるまらるる  
まらるるまらるるまらるるまらるる  
まらるるまらるるまらるるまらるる  
まらるるまらるるまらるるまらるる

ねむるにふし  
れ女に乃侍事と奉在侍候しぬ

井  
侍出衆乃事侍にありて

秘  
此病ともいふ事にて佛法修む事

六重乃世とい

是より女に乃侍事しりて奉在侍候  
侍りあり奉在乃侍候し

あまの世にあり

あまの世にありていかにいかに侍候事

奉在乃世にありていかに侍候事

奉在乃世にありていかに侍候事

秘  
いかに侍候事しりていかに侍候事

松といひ人の世にありていかに侍候事

あまの世にありていかに侍候事

いかに侍候事しりていかに侍候事

女に乃侍事しりていかに侍候事

いかに侍候事しりていかに侍候事

昇  
侍の事

まねるうりういあやし

源氏乃介みゆきう清りうりあよひ

きりうま 秘 雲のまへ 昇

とねーとち

きりうまこまこま 秘

あまーいーあま

秘 あまりによるさは乃あま

私云いーあまーいーあま

又大納之あましのいさつ 可 家司

秘 けち納之系塔うさう 秘

いばさの女之まのあま 秘

系塔乃介あつさの女之ま 秘

じ事をとら

昇 牛産院別南系塔一人奥よ 秘

年よの院乃 秘

てとあり日人あま 秘

ひーいあまーあま

帝王女遇庶人 秘

正三位源朝臣繁休者澠滅天皇之女天  
皇選聲未得其人太政大臣正位右大臣  
良房初参之時天皇悦其風操倫珠初  
婚之

一品康子内親王延喜配九條右近相生国

院太政大臣公因

秘澠滅天皇延喜内親王の女を娶り

右近將乃

秘 相中 并 内親王の女を娶り

たうさい

ちきり替りあふりつひのひひ

かをよこのひひ

よ 女三人侍りしりしめは所ありて

かをよこのひひ

并 世人の清き子よるま

女をよこのひひ

よこのひひ

よこのひひ

さうしちせハ又のそび人トあり

何れめいしと

何 松浪と根奇

其ういれし

後仕ち后 梅子乃みし 并

内侍のしれまき月うのあねさ方

<sup>秘</sup>

さきくちあねち后乃家いけ内侍のしれま

<sup>瓦</sup>

二乗ちあねち后のてまん梅子乃のめい腕月

内侍のあねまき

<sup>秘</sup>

二乗れちあね乃ゆりしと

昔ノ梅宮ハ

<sup>秘</sup>

おろしとろけあひしと

梅ハあねちと

かこがあしと

<sup>花</sup>

うさあねちと

なる事と

友大細ハ

前々大細乃朝后と

主君院の院司大細乃と

何れもあつて一人の面をいかにしむる事

権中御之 秘 夕霧の弁

人はよくあつてす

身直院の夕霧は直女との事と云ふ

はむりりやとや井原女宮りぬる事

何れもあつてす

よもてくおきて

や井原女宮にきりぬる事と云ふ

ふりぬる事と云ふ

女直のしつと

秘 や井原女宮の事

つまひあつてす

や井原女宮と云ふ事と云ふ

けりぬる事と云ふ

しよめと云ふ事と云ふ

あはれあつてす

可 かおてしつと

あつてす

舟  
川舟日

舟の海りたり

は帆タまりの船とまじり

まよふもふまじり

いづれもつらつらと

のられぬもの

秘  
な代の事

とらぬもの

とてもつらつらと定まぬもの

よまよふもつらつらとまよふもの

ふいと舟のつらつらと

けめぬもの

舟のまよふもつらつらと

舟をよせぬもの  
い矣 舟

舟のつらつらとまよふもの

まよふもの

かひあつて

あのお舟

舟のつらつらと



この宮は清和

<sup>秘</sup>六條院は清和の御宇に

かたがは清和の御宇に

是より清和の御宇に

いさく五とされて

<sup>弁</sup>源氏九 院二二とありひし

<sup>秘</sup>朱雀院は清和の御宇に

さうひとあやまらぬ

<sup>弁</sup>生老一 院あり

いはさのりみこをもち 朱雀の清和の御宇に

あらやあり世は清和の御宇に <sup>弁</sup>定規

<sup>秘</sup>次来くこととていさくひし

院不定の世同あるは清和の御宇に

しとまふを清和の御宇に

申してひさくまの御宇に

清和の御宇に

さうひの御宇に

申していさくひの御宇に

をむくみあつり給うし  
いづれに世にたてし

年源氏古歳くわりし  
いづれに世にたてし

私事産のせとてし  
いづれに世にたてし

いづれに世にたてし  
いづれに世にたてし

いづれに世にたてし  
いづれに世にたてし

いづれに世にたてし  
いづれに世にたてし

いづれに世にたてし  
いづれに世にたてし

中知言

夕霧の事と源の事

いづれに世にたてし

た中辨力の心

いづれに世にたてし

年産れ一定源の事  
いづれに世にたてし

いづれに世にたてし

源乃思ひ給ふ

いづれに世にたてし

源乃思ひ給ふと事  
いづれに世にたてし

ありふまゝに

さしうらまへし

入内御

承んし

何<sup>ハ</sup>先<sup>ニ</sup>こゝれ

秘<sup>ニ</sup>名<sup>ニ</sup>く

あはれ

未の

好ま

改院の時時

并 澄柳

秘

先雄と

秘<sup>ニ</sup>先<sup>ニ</sup>雄

い

秘<sup>ニ</sup>威

何<sup>ハ</sup>い

私

入

こ

秘

女との交れ母し藤原と姉妹あり事并

くらししゆつさめは

藤原よつさしては女之交の母らしは

よりえありして源氏と帝しとひは

源氏と源のゆしと帝しと

よかりくは

源のゆしと帝しと

つらきとくはりし

やしりれぬ

秘

十二月小なることしつり歳書にありと奥

とくしりありしとくしりしと

年産院小のゆしとくしりしと

可

李部王託天曆六年八月廿七日大上皇の乳母

加賀命ぬき送云院清徳跡重法令送ま

可重之由去月一日至二重院依所物と立物門

介葉門令去廿七日八九日清徳危急世間

以後願平獲し六日長今奉上りしと

日け候と旨と同絶良久し入東院を以若清徳

宣旨由宣刻宣旨主日吉日廣儲入内

私云是嘉平の御門内徳よよて内蔵儲

清のりとの事

昌子内親より乃内より中より代例と云の事有

院の清り女列入内徳の可方

孝部王託云天曆六年十月廿八日昌子

内親王初服袴主上親結腰給其腰物近

清厨子所弁備之其漆臺四本以銀器備腰

小其至二本以銀土器代備菓子親王家献焉

厚清第一腰書法四夫、牛在院并殿上男女  
宿願其侍臣十餘人、弘徽殿南廊給内者中  
官職給祿

之殿ゴのめしとて

柏果殿 牛在院ニあり

久名れ西の射也

東文故事曰後文有年柏局有年也

柏殿者皇太后清在御也見九條右近相曆記

三月三日侍奉直院柏果殿指矮春各有一字

應

太上法皇制表

揮侍字并序

三月三日宴于池上蓋思古之曲水也梅柏梁以  
櫻蘭亭向花林而載楮木皆是好因游樂也  
為風月重時節之所致之義也請各各一字  
惜後春云今謹序 詩畧

御記云康保二年十月廿三日己未此日行  
幸虎入自永寧坊就馬場多乘輿移柏殿  
於延喜聖代之例每秋幸此虎而柏梁殿燒  
亡之後都無此事而去及新攝柏殿立元則

作畢故設今日宴也

孝節王記云天曆九年七月十日太上皇遷  
御朱萑虎扈從公卿及執侍從西馬助等  
給座柏殿西射

私之殿の事し女夷しモアリ

もろしりの后のかり

河 秘 苑  
暹 澱 天皇弘仁八年男女衣服用唐法  
周禮王后六服ア六服アリ 苑多見アリ  
周禮王后六服ア六服アリ 衣袴ユ杖闕ユ杖鞠ユ衣ユ履ユ

衣しりり 女根可付云々令戴少強金  
瑞明年 冊為貴妃 半后服用

清より花ひみみふふととと

可 康子内親王乃清めいの子ゆひ小一重九命此

太后清紀云第平三年八月廿七日女清清めとま

清中りた 孝部王紀云第平三年八月廿七日

内親王初若裳衣成一點十一重九命 康子 親王 結中表

腰滋野内侍理髮尚侍結本繕即叙二品

追表也清云おふいふの清りるぬりふゆひ

しと下乃ふふらえふぬぬらふははは  
螺細の衣々こ一ふひふふかしの衣はまふひ  
らもまて世はあふふふふも高の清り  
ふふらとてまふりあふり  
女三ま乃清り花ひ敷仕おあこ

半よりこころのそと

秘 花右大臣

みこそら八人 親王とて

内去文乃こす

内裏のむし人よまゝのあし人  
花人取乃せまんとあ

花人不 細飯き、 他清おまじ

同云女と云清裏若の叶日ままおま

花人取乃せまんとあ 一物若花人取乃せまんとあ

進物取乃せまんとあ 一物若花人取乃せまんとあ

進物取乃せまんとあ

考者の大臣乃清ひひまの物

若裏れ腰ひひまの若者と号を二物

是ハ大獲乃倒 ともて清ひひまの物

とりり若者 唐朝ハ徳壽蓮花

よ一しあまハ若者とりりせ

中まとりり清ひひまの物

秋好中ま

清ひひまの物 清ひひまの物

かり清ひひまの物

秋好中ま

秋好中ま

秋好中ま



雀院の女と多くうらむせしむるの由うの  
くしハ島一やうう一柳松や一我れ女宮  
立居一時目わら一ゆら一あげのくあせ  
もこいめはえんみあせうりむ  
ものせぐん

むしーのいふしんせいらうー  
まのえんの子け

<sup>秘</sup>申文持亮こ  
院乃殿よめし

け持亮ハ身雀院乃殿上人とてあつた

くふ事れ

<sup>秘</sup>院つんせりうらう三事とせ

<sup>秘</sup>妹文のゆらうあう院乃殿ううは  
さうあう音と今まはふれハ其とてそみま

<sup>可</sup>好中又舟まましやうね時えあめり

<sup>秘</sup>そひもゆらうのこあしは事し  
けあういさあう一柳に嫁ありて西

こまうしやうけ文しううは其ひまうに文

早下りの包あり 同并

しーあーのめ入字二方の包の掃と六ひに  
せしやあふれいさーあー森さりの後拾遺さき  
とさーあーのさーとさーれいあかろ後拾遺ひま  
ちさーあーさいさーとさーあーあーあーあーあーあー  
あーあー拾遺(集)あーあーあーあーあーあーあーあー  
あーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあー  
あーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあー  
あーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあー

新文の馬さうしてあひま

あひまけーさあーあーあーあー

秘あひまけー林ぬ中入いさ并さひかあ

あひまけーさあーあーあーあー

林ぬのあひまけーさあーあーあーあーあーあー  
あひまけー

しーのあひまけー

秘あひまけーのあひまけーさあーあーあーあーあーあー

花あひまけーのあひまけーさあーあーあーあーあーあー

あひまけーのあひまけーさあーあーあーあーあーあー

きつらんからゆめいふまははまのこりみ  
<sup>秘</sup>中まのこりつらんけ女まことからゆめいふま  
<sup>并</sup>中まの女こととゆめいふま

同云ゆめいふまのこりつらんけ女まことからゆめいふま  
こりつらんけ女まこととゆめいふま

ゆめいふまのこりつらんけ女まことからゆめいふま  
ゆめいふまのこりつらんけ女まこと

中まの女まこと

つらんけ女まこと

河集

の年記

ゆめいふまのこりつらんけ女まことからゆめいふま

<sup>秘</sup>多戒乃河因和集

<sup>河</sup>

元慶三年五月八日丁酉是夜太上皇を落傷入

孝部王記云天曆六年二月廿日河を上天皇と落傷

入通延暦ち座之權大僧却延昌乃和法僧を

之持律却法朝乃親お却判片管運照河因集

覺祐已海乃頃却

多戒乃河因和集と云後河因和集と云

と云のやうなり

身産の湯りかろりらせしあまのいしあまの  
湯りまのひまされしてまごあまのいし湯りあま  
おうれまの文 秘 女ごまの  
六条院とすまの湯りかろりらせしあまの

身産湯りあまの湯りかろりらせしあまの  
いそりあまの湯りかろりらせしあまの  
湯りかろりらせしあまの湯りかろりらせしあまの  
何 大皇對千五百ヶ一二十勅方田千町  
私云太上天皇對千令條よの世  
たあまの

いそりあまの湯りかろりらせしあまの  
湯りかろりらせしあまの湯りかろりらせしあまの  
令條よあまの湯りかろりらせしあまの

同書東院西書之流早ううりあまの湯りかろりらせしあまの  
太上天

皇乃後次ありしやありし御封年な幸壽  
をいひた上天皇といはるる事なれどもこころは  
しりしありし御封の後乃保成か父等御  
そよみ御封し同封なれどもそのいひれ事な一  
ハ後次ハ千方なりしハ後次しとてしめ  
なれと封なりしとてしめ

まことのち上天皇とてしめしはけむり御封  
秘 源乃幸く万世とてしめしとてしめ

私太皇太后とてしめし御封とてしめ  
始めとてしめし御封とてしめ

そ乃ち御封し御封し御封し御封し御封し  
ゆりののち乃ち上天皇とてしめし御封とてしめ

まいのち御封し御封し御封し御封し御封し  
秘 常乃御封し御封し御封し御封し御封し

同いなりし御封し御封し御封し御封し御封し  
先 西宮抄云太上天皇御封し御封し御封し御封し御封し  
後初出大内時 今皇康成なりし御封し御封し御封し御封し御封し  
朱金鋸御封

車とて世のうらまひ

馬車乃の儀成るゝいふ御いふと世に

是あつくりりちりり

おろしきすこふ

本意のなれ清夜のこゝろを

うそひくくして

清乃清夜とまゝく

くくりまふ清あり

秘 清夜鏡のいふ

よみゆいふいふ

清乃清夜のいふ

こ院おとくれ

秘 清乃清夜のいふ

こ乃のいふ

秘 出夜れいふ

ひあふいふいふ

本意清り出夜り

男めりわていんまやんま〜

牛産めら〜い〜海のがたあ〜  
流りかやき〜

ま産のつら〜

まら河す〜

秘 院のつら〜

何 ころせ〜い〜

海り〜い〜

人のせれま〜い〜

〜あ〜い〜

あま後り初〜い〜

井 雪んれまの事〜い〜

公〜い〜

秘 今〜い〜

ま〜い〜

井 流り〜

秘 今浦あ〜い〜

は〜い〜





と急乃ふれますのま

可

儲君 後女侍位ついでに生身の侍

私末代のまへなることに近侍のま

の中かにおままらること

そむかしありま

いふ宮位すけのことにおままらること

おくれにおれのままらること

しらべのままらること

女侍のま

秘

何事ともままらること

ままらることにおままらること

女侍のままらること

女のままらること

ままらること

ままらること

れをすて後の世の侍のままらること

秘

ままらること

私のままらること

ハチの神とてさういふこと  
らなすまひんか

秘 流るる事

ふかふかのたまりとていふ事  
何 忠仁公事 在路

秘 漢天宮の流るる事

人としていふ事

地位のふかふかの事  
さういふ事

ふかふかの事

さういふ事  
さういふ事  
さういふ事

秘 流るる事

秘 流るる事

さういふ事

秘 流るる事

秘 流るる事

そりくまふくみあめ月日乃

日月流遠哉不我與

毛詩

日月逝矣哉不我與

詩經

イニ

内親王一人

并

同云女まゝ親王宮卜ありて早すうや和合  
しあふくみあめ月日乃

是源一若わさぬみゆつりは牛産の所因

按中御云々の

おきいふちまみまらしむし

可

先せられて

又源のむはお國のむよありくさ

中御云々のありて

秘

源の初し 夕霧し

何事とまうくはくして

なほしひらふまひあさうし

くけあし

是より源の糸川の初し

あり此のまて

秘 源の神方ハあるにせし

おつしきりしけふかりしハ

秘 何事ハ世に世のつらき

とと致方のりまに

あつしつ院のつらき

年産の度日源信奉り

河 何のつらきハ物ハ

内膳自西階供侍膳其膳供

とと業ハ侍也

私ハ侍ハ侍也

つらきハ侍也

秘 何のつらきハ侍也

院のつらきハ侍也

秘 何のつらきハ侍也

侍出家のねらふ

元

綱親行を時主上清帝相の位に遷せ給ふ事有打  
ま上清帝の御心三准之入清神八依而信仰之  
目し針と八應量思ふ心出家の御心思ふ  
乃清神出まおし後二月三日綱親行をのめ延長  
此門仁智の御心思ふ時八清神御心と御心  
まて又平之物もつり又まよふもはるまゆ  
日此等八信守りましあり此は神の御心思ふ  
こころを信の時乃れおろろまれあつた御心  
みま信に信りおろろ大信信におまて此御心  
母れ

ゆる寛平法皇の御心御心  
あつた御心すらの御心

秘 弟子の御心

別當大納言

此乃言れ御心  
此乃藤大納言女この御心しつら御心一人

女この御心しつら御心一人  
やとく御心しつら  
おろろ御心しつら

秘 源氏筆上にかたりけりん筆しつこし 年

はしとあしあし母沈も

秘 紫上れ心之様母沈もも新しんらほりか

らりそたふ筆ハるは心もまひのり下し

かりぬいあしこ

紫上のりるぬし

いとおくこり筆しつこし

是より筆上れを筆しつこしひぬり源の心

中しつこしあつこし

秘 けり筆上りりりりりりりりりりりりり

野中乃りりりりりりりりりりりりり

みさしつこしあつこし

秘 此今心之様つらふ筆しつこしあつこし

の心筆のりりりりりりりりりりりりり

いあつこしあつこし

秘 近年しつこしあつこし

あつこしあつこし

秘 年筆上りりりりりりりりりりりりり

私にさういふ満をあらんともあらざれ  
清中きこころ事小すすの打女はな  
お木をあらん

流乃るれりしけおく

<sup>秘</sup> 後の観

あふまある事しと

こまにさういふのあふしはあふ

とくくそ人のいひあふ

原氏のいひ事よむ人活さくし事し

人けでかろしとせ

た中キとして信しとすの事

ふいさくのけしと

事産乃直書よあまきけお信しと

しとく事し

久さふ <sup>カエサイ</sup> 秘事

あららあや

<sup>秘</sup> 繁上何とらとひは

いみしき事ありと

源乃一牛しるはきこに公乃さる年しは  
ウ乃清りすもあしん

秘 女ニ交ス

しきとよのめさすハ女こはあまのね  
るらひい清りささひき

秘 源乃とささ公乃キ

い事上ハられやまてまはキをさる姫杯は  
はうれんんん

いとけきさうして

秘 あま乃さる清りあし

あま乃さる清りあし

むしあま乃さるの河

こしあははらあま

まれハ何しあまのま

あま乃さる清りあし

秘 案乃乃こりすもあしんはあまのま

くしあまのま

かりんあま乃



松  
案よれ也ハ他ニ人多ク之ヲ慕フ也ハ其ノ徳ニ由リ也ハ  
元  
藤臺ノ中ニ居リてハ或レ多ク之ヲ慕フ也ハ其ノ徳ニ由リ也ハ

あまのりがしちとげきり

松  
源の詞

あまのりがしちとげきり  
の徳を慕ふは其の徳に由る也

まこといふ

いふまじしは實也

せりんれらとていお

秘  
人の中ニとてハ孟子ノとらり何レ海ニ也ハ孟子ノとらり

何

魯平公將出城舎者請曰他日若出則必  
命有司所レ今素興ニ駕矣有司未和所レ故

請公曰將見孟子曰何哉君所レ為輕身ニ以先放匹

夫者以為賢乎礼義由賢者出而孟子ノ後喪踰

前喪君ニ見焉公曰諾 孟子、皇書王下

人さうと人よさうハ好ム也ハ其ノ徳ニ由リ也ハ

人のあつとさうハ好ム也ハ其ノ徳ニ由リ也ハ

しらあゆし 昇 方ちゆし

心ひらめくこと

秘

~~~~~ (~~~~~)

~~~~~ (~~~~~)

おりのりいんたんてきよぶかきまはる

くうくう~~~~~ (~~~~~)

心ひらめく

秘

~~~~~ (~~~~~)

~~~~~ (~~~~~)

おのりいんたんのり

~~~~~ (~~~~~)

秘

~~~~~ (~~~~~)

~~~~~ (~~~~~)

秘

~~~~~ (~~~~~)

~~~~~ (~~~~~)

~~~~~ (~~~~~)

~~~~~ (~~~~~)

秘

~~~~~ (~~~~~)

~~~~~ (~~~~~)

~~~~~ (~~~~~)

伴現物活むし〜まのうらもてはら〜らぬの  
ま〜と〜うけふおま何のわ〜も〜ひりは  
やあ〜ん〜ま〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

はみふれむとけい〜す〜ま〜ま〜の〜う〜あ〜ま〜ん〜ん  
ちねの清事〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

<sup>花</sup>舞王はちねおまお管方ま〜とあせう事〜と  
乃ま〜れ〜う〜う〜ま〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
いら〜う〜〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

室の継母乃〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

この事〜う〜ま〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

をひ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

<sup>秘</sup>はま〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
ひ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

し〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

<sup>秘</sup>紫上の今いむまをよあ〜り〜てあ〜ぬ〜ん〜ん〜ん

〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

人〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

昇

軍上と昇るひおむくののりうきとらり

うしとらりぬ

花

源氏平歳ふたりまじ 秘昇

こころあつて

秘

雲ちりつとま拍子藤太ゆえまじ

ゆめは清りせ

こし冷泉し入のりまじ

ゆめはこころせらふ

秘

源氏平歳

こころあつて

ヒナラ 後 論法

台子 二七三

二月の日のあつたはらぬのむすぶあつて

私をこしけりてのり

昇

正月の日のあつたはらぬのむすぶあつて 大なるうらあつて

秘

むすぶの日のあつたはらぬのむすぶあつて

大なるうらあつての野に出てもうきあつて 秘

花

延長二年二月廿七日甲子子平のむすぶあつて

社殿におひて辰ぬりて後年女洞和長年

よき伝述



清形頂代御存字一と娘共て教の事とて  
かゝるのゆゑ草と橋て毛と伴して統を介  
しに和清門人小わさきさひさる宗弁ゆり  
といふ人一人は

おろくの紙かきとる多あはれ  
あつたあまにかへ

その飛子しとさうりつ清い  
苗村おろくはちぬちの清たれ  
まはれおろくはちぬち

おろくのふしとさうりつ清い

みかえれやうのあつた  
放出店早のたしと統云出衣

おろくの南のやうの南西  
乃事さういふまは

六條屋母屋

いやぬく  
屏風 碎代 又防壁

いーあしはあしと

河

倚子いましは案と二重花より力の清めり

秘

そつてうりしみるうりそハ略一うり  
そのいりあま略すうしやいし案をぬか

倚子のあはれ

松物いまより白螺細の倚子とてうりあり

河

一きいりまいり

地鋪へ居てよみ又き案下りりるわ武松

地鋪あり春日

私唐送小縁とよりそらわぬ松平ねははら

氣取

河

地鋪寺 延喜十 六字の案 當清座南底鋪地敷二枚其

上鋪四幅帛備舞踏所

清

河

日山記 行幸寺より 西向東座當同座牙同啓用敷

けり

河

脇息同 山記云三蔭綸大床子三脚其上三枕番

狭息一脚

その清り

年のりりるふ具とせ

ねはきる

所てんのりづー二よりひ

何

螺鈿延喜六年清和天皇御記云母座前立二人磨

蒔繪厨子四基

二基納法服二基納法具

同十六年清和天皇御記云二人蒔繪厨子各納法服

各夏各五具

乾

仁和元年大政大臣賀夏衣衣言衣五籠衣厨具

屏風有数

清衣とこりてきて

秘

平乃の髪るりよりしてやあは

なみののゆさうき

秘

や季とより 弁

くりこらよりぬる二馬すらぬゆさうづさぬげぬ

何

寝殿装束

二階一脚南

上置火取佛付杯有臺中階壺臺枕籠  
下硯匣一合及置唐櫛匣次鏡臺

一脚

置厨子二脚東置櫛匣二双其下置香臺 匣  
西置童子菜匣其下階櫛匣其臺

乾

付置有臺并蓋 くりけりるこを打札草



松

并

しんこうちんくわんこうらみりぬいさの題  
Shinsho (Sui) no Shinsho no Shinsho  
市川一乃乃のいよはぢしんくわんくわんくわんくわん  
一乃のゆめとしのわんくわんくわんくわんくわん  
しんくわんくわんくわんくわんくわんくわん

秘

延長二年正月廿五日  
同立棟頭机一脚有銀山銀水金銀花樹等  
此のり花と巻よきして光とくとき表也  
わんくわんくわんくわんくわんくわん

棟乃花巻

秘

はらひあしんくわんくわんくわんくわんくわん  
とらくわんくわんくわん

雨聲

わんくわんくわんくわんくわんくわん  
くわんくわんくわんくわん

わんくわんくわんくわんくわんくわん  
くわんくわんくわんくわん

みらる地ちんくわんくわんくわんくわん

くわんくわん

秘  
おとてしるのそく原のそく  
おとてしるのそく原のそく

おとてしるのそく原のそく

原のそく原のそく  
おとてしるのそく原のそく

秘  
原のそく原のそく

おとてしるのそく

秘 奇  
おとてしるのそく

秘  
おとてしるのそく

秘  
おとてしるのそく

秘  
おとてしるのそく

秘  
おとてしるのそく

是とつらむげぢし

え 舞つらむに人のうたはなほおとす

何あまのむねの日後男とていふおとらむ

いふまじりのまじりあまのつれづれ

とわりなまこと人のこゝろにこゝろ

井

異河海をむらう腹をくちくち

あはしつらむ

音直交り

とらむとらむとらむとらむ

秘

源有司

うたをきくはな

秘

清原なる

中御女のあまのつらむ

秘

や井の尾のほ

人

秘

い清原と井一

河

上東門流りて字なる

ゆるり

法成寺入道若園白大政大臣

のまゝくまふんありしむらゝむの松の年を(

まじゆ流くあり

まじゆ流くあり

まじゆ流くあり

まじゆ流くあり

まじゆ流くあり

まじゆ流くあり

まじゆ流くあり

まじゆ流くあり

まじゆ流くあり

まじゆ流くあり

まじゆ流くあり

まじゆ流くあり

まじゆ流くあり

まじゆ流くあり

まじゆ流くあり

秘 花  
まういねの上れ事ゆい

それねまの秘人まきまうつれ玉袋等して

ちねのしんねつるまきある秘小座等しねつるし

ちねのまきりふまきのかぶらまきひまはる物等

舞之原氏政任まきのまきゆわら物まてえ

ふらりまきけりまきのしんねつる

市じりこ乃まきまら

秘 花  
ちねの清子まらひ或るまきの原地

秘 花  
まらまらまきの原地まらねの免身

はなまきのまきまらまらたらまきやく 何 報役

式部乃清孫ハナマキマラマラマラマラ

こものまきまらまらまらまらまら

何 義物 軍ね 折越物 子

こもの献物 乾物る原へ 舞 子 何と乃 秘 花

まらまきまらまらまらまら

外記延長二年正月廿五日御賀中務局教

慶親王以下同並輔朝臣執捧物惣并捧 秘 花

し類或は預養物 盛小髭置梅柳也

菓子ハ入自曰華門到立庭中一列親王以下先  
儀以上二列五位  
各奏物名訖内膳正忠望卒膳部入自曰  
華門受捧物出自同門

清くくけくくくくくくくくくく物

清土器下ハ盃乃下ゆ

可延喜十六年清賀清記云諸中務卿親王上  
野太守親王太宰卿親王行酒于時内膳門賀  
藤原朝臣奉有金酒杯属給即進盃飲記  
施舞 延長清記曰宋女調和若菜奏借進宋

女人以供進餘養給侍臣盛中境置中盤

らんが物法云云らんがねのひげまうまある物云

清まゝのけ

源の清ゆ

紫くつさ

秘清黒く

牛鹿流のゆきとりの事

可清草草

清松草

たらしぎんそでゆめ

まうと平命一ゆめを

かくんあといやう

何

延喜十二年尚侍が清託云今侍臣令奏經款  
自彈和琴中勢卿親王彈琵琶克明親  
王彈琴い不召樂人事此等之例歟

序いえあしいとむいとれい

秘い 名乃ねんい 乃ねんい 乃ねんい

弁 王聖乃ねんい

私樂聖乃ねんい 乃ねんい 乃ねんい 乃ねんい  
乃ねんい 乃ねんい 乃ねんい 乃ねんい  
乃ねんい 乃ねんい 乃ねんい 乃ねんい

和乃ハカ乃い

和乃ハカ乃い  
乃ねんい 乃ねんい 乃ねんい 乃ねんい  
乃ねんい 乃ねんい 乃ねんい 乃ねんい

餘の人ハハカ乃い 乃ねんい 乃ねんい 乃ねんい  
乃ねんい 乃ねんい 乃ねんい 乃ねんい

乃ねんい 乃ねんい 乃ねんい 乃ねんい  
乃ねんい 乃ねんい 乃ねんい 乃ねんい

秘い 和乃ハカ乃い

上乃ハカ乃い 乃ねんい 乃ねんい  
乃ねんい 乃ねんい 乃ねんい 乃ねんい

琴和名曰日本琴ハカト  
万葉集俗用和琴ハカト  
也未止古止譜序夫和琴者依為本朝之

奇蹟不載漢家之書籍上始自神皇下至于  
人倫之今公宴之庭私遊（時互不相携）但云  
調子云拍子暗習音曲不傳（案譜）

又菟哉天皇別令此曲侍之尚侍廣井女王（後  
顯中絕承和聖主深好袖琴召慈賀善於（口）  
階下習御其曲凡大臣潭信卿同習其曲于時相  
邊有輝教翁之也長此道仍遣右近少將良拳  
宗貞暗令侍其年又貞觀聖皇召藤原朝（樂  
井小習傳彼時貞保親王家勅命願作其譜也

延喜聖主極絃管之妙其中和琴五長史傳  
賜左兵衛佐藤原敦忠卿習得其朝臣（茂）  
慶聖主勅命云詣式部親王敦實（評）可習兼  
又充大臣雅彦卿為彼親王家督（深）傳此典降大  
納言時仲參川守經相哉前守經宗（號）兼（後）  
庫頭邦家雅樂頭範基等朝臣皆相傳（倫）之（樂）  
已上右兵衛尉經高臣進公家

武流之和琴乃監觴（六）張（七）之（八）之（九）之（十）  
分（一）之（二）之（三）之（四）之（五）之（六）之（七）之（八）之（九）之（十）







又字とやうあやふふと云ふて

はなはだちかた

あつて人々あつてはあつてありあつ

我れもはまゝいふのそなたのいふ

をも強不可なげ一色あつて整え

物もあつて人と云つてたのみ隊のうら

やうあつていふは物もあつてのうら

一武才一色といふはあつて

けいこつていふはあつて

はあつて

并

やうあつて 中め又字

私物もあつて明くを名お云後あつて

ついであつていふは編板源のあつ

そつてあつていふはあつて

いふはあつていふはあつて

あつてあつていふはあつて

あつてあつていふはあつて

あつてあつていふはあつて

あつてあつていふはあつて



秘 孝子生まらぬと云ふ

常陸宮ハ末摘の又まゝみやみ

いひり北野よとて紙屋り

ふあ

みよとてとてとて

源一とてとて

とてとてとてとてとて

おあり

有五家髓胚入漢成次ハ奉七病喜撰

或ニハ出四病源水髓胚有八病を

とてとてとてとて

源の生得あな不塔り

とてとてとてとて

とてとて

とてとてとてとて

秘 親をとてとてとて

とてとてとてとて

とてとてとてとて

いぢまへ物し

動すくまのしよのあしは好む

さいつあしきもあしき

くあましき始ふ

車 ぬるまじきとまりあし

秘 ちやうのまじきあひつて

あまれし

しあられをぶし

あましきあま

原はうしきあま

しきあま

しきあま

秘 じまじきあま

うらいつてあま

秘 じまじきあま

秘 じまじきあま

常陰文のかいあひ

筆乃のあま

ひみれきこふひてまれいんぬく  
こくしそいそくりきれ

初秋の髓はまことのいそひた  
ふし虫のせこあひいれれとん  
えぬんれみまはうらまへし一  
ひねあへいそしはまのいそひ  
うらまへしうらまへしうらまへし

いそ

娘を丹にくりしむいそひ

源の河へ

ゆなれ娘君のいそあも一  
おろそそ月うらまへし

よくて女のたてこゝのあも

をく一のあも

きりあひしうらまへし

いそ

何事しうらまへし

たてこゝのあも

おふおふおふおふおふおふおふ

くこのすくらんていこよりかすめて

はめて

<sup>秘</sup>又ひをいそしむせいらくはくはくは

ももとの中箱にまゐりて女の髪を

くしはくふん

はくはくはくはくはくはくはくは

<sup>秘</sup>く物清りくひてま橋のせは

はくはくはくはくはくはくはくは

くくはくはくはくはくはくはくは

はくはくはくは

<sup>秘</sup>くのひまはくはくはくはくはくは

はくはくはくはくはくはくはくは

くはくはくはくはくはくはくは

くはくはくはくはくはくはくは

くはくはくは

<sup>秘</sup>まつ心斎めくくはくはくはくは

はくはくはくはくはくはくはくは



かゝるおもしろい傳あること  
御上の御心へおしよるに  
てまゝの御心のおもはれにま  
まひかてお事しうてお事し

ふとけすてぬ

<sup>秘</sup>うきまのうきまのうきまのうきま

おやけなう

末橋はうらうらかゝる御心のおも  
れとてお事し

<sup>秘</sup>うきまのうきまのうきまのうきま

うきまのうきまのうきまのうきま

<sup>秘</sup>うきまのうきまのうきまのうきま

うきまのうきまのうきまのうきま

うきまのうきまのうきまのうきま

うきまのうきまのうきまのうきま

うきまのうきまのうきまのうきま

うきまのうきまのうきまのうきま

うきまのうきまのうきまのうきま

そりかしてたうして右今の奇は  
いせりてききし時いりくむの  
うはれ衣紙のうてんあや

こあれはま橋のあやうられのあ  
ふいそいあくねひおてせりて  
こまみまこちて衣をうんせ  
このおめそあやうてお方のあま  
あまこひえうれゆきはまこ  
こまていりてあまは理とあけて

は—お(あ)るこまあま  
ふせりて—あまはひてあま  
物なり

とほりたうやと我ありあ  
ら  
右奇河くす物





